

# 女性の活躍に託す新たな秩序構築

## 日本占領期・インドネシア独立期を舞台とした ルー・ポーイエの小説

篠崎 香織

本論では、マラヤ、スマトラ島、ジャワ島を流浪しながら少年期・青年期を過ごし、その経験を綴ったルー・ポーイエ (Lu Po Yeh/魯白野) の作品のうち、1948年前半にシンガポールに拠点を定める以前のインドネシアでの経験を記したルーの小説に着目する。

ルーは1923年にペラ州イポーで生まれた。父親とともにペラ州内を数か所移り住んだ後、ペナン、マラッカ、シンガポールに移り、1936年頃にスマトラ島にわたった。ブラウン港からメダンに移り、メダンにしばらく滞在した。日本軍が1942年3月にメダンに進駐すると、スマトラ島内陸部に避難した。日本の降伏後メダンに戻り、パレンバンを経てジャワ島にわたり、1946年から1947年9月まで従軍した。除隊後はジャカルタに移り、1948年5月頃にはシンガポールに移っていた<sup>1)</sup>。

インドネシアを舞台としたルーの小説の時代設定は、日本占領期 (1942年～1945年) からインドネシア独立戦争期 (1945年～1950年) にかけてであり、ルーがスマトラ島とジャワ島に滞在した時期と重なっている。いずれも秩序が大きく変わり、戦争がすぐそばにあり、平和とは程遠い時代であった。戦場のし烈さを描いた作品もあれば、戦時とは思えないのどかさを描いた作品もある。主人公の国籍や民族性、性別などの設定は様々で、インドネシアの原住民である場合もあれば、華人である場合もあり、また、イギリス人やオランダ人と思われる場合もある。

インドネシアを舞台としたルーの作品は、『流星』、『春耕』、『夜明け前の行脚』(黎明前的行脚) に収められている。そのうち小説を多く収めているのは『流星』と『夜明け前の行脚』である。『流星』に収められた小説14作品のうち8作品がインドネシアを舞台にした作品である。『夜明け前の行脚』に収められた39作品のうち小説は9作品で、インドネシアを舞台と

した作品が4作品ある。『流星』は1955年3月、『夜明け前の行脚』は1959年12月にそれぞれ出版された。いずれも全てが書下ろしではなく、1948年から1955年あるいは1959年の間に書かれた作品をそれぞれ収めている。インドネシアを舞台とした作品は、具体的な執筆時期が不明なものもあるが、いずれもルーが1948年にシンガポールに移って以降、比較的初期の頃に書かれたものと思われる。植民地からの独立を明確に掲げて独立戦争を戦うインドネシアについて、植民地からの独立について具体的な方向がまだ定まっていないシンガポールで執筆していたということになる。

インドネシアを舞台とする作品は、(1)女性の強さを描いた作品、(2)インドネシア独立戦争期における華人の境遇を描いた作品、(3)混とんとした社会情勢の中で何が正義かを問う作品におおむね分類することができる。分類に即しながら内容を紹介する。小説中の〔 〕は筆者が補足した情報である。以下に紹介する作品で「私」という一人称は華人男性という設定である。

### 1. 強い女性たち

ルーの小説には、日本占領期やインドネシア独立戦争期をたくましく生きる女性たちが登場する。これらの女性は、抗日活動やインドネシア独立戦争を牽引する存在であったり、「今日は春ではない」、「戦塵抄:上」)、日本軍政下で安全や正義を守るために男を駒の如く動かしたり(「南燕北雁」)、知恵を絞って男の束縛から逃れたり(「黒い果実」)、圧倒的な芸術的な才能を発揮したりする(「逃亡」)。

#### 『今日は春ではない』(今天还不是春天)『流星』所収

商売に失敗した私は、1942年にペナンからデリに渡る船上でイポーから来た劉海倫に出会った。海倫は私よりも若いが人生経験が豊富で、観察眼も私よ

1) ルーの流浪の遍歴と、ルーの著作リスト、ルーの作品に対する先行研究の評価は[篠崎 2020]で詳細に論じているので、こちらを参照されたい。

り鋭かった。ブラウンの海岸で海倫は大胆に肌を見せ、曲線美に富んだ体型を露わにした。私は海倫に惹かれた。海倫はメダンでおじ〔姑丈、父の姉妹の夫〕を探したが、拒絶された。海倫が学生時代に中国の救国活動に参加していたためである。海倫は私の家に住んだ。家事をしてくれ、私に姉のように接し、時々小言を言った。しかし海倫との間には壁があった。海倫は自分の過去を放さなかった。イポーを幸福の墓場だと罵った。

私のいとこの洪孜がメダンに戻ってきた。海倫と洪孜は、かつてともに救国活動を行っていたことが分かった。海倫は洪孜とともに去っていった。

私はイポーに戻った。ある晩、娯楽場で日本軍の捜査を逃れようとする海倫に遭い、夫婦のふりをして急場をしのいだ。洪孜は憲兵隊に殺されていた。海倫は泰緬鉄道の現場視察に行く計画をしており、私に大信洋行の渡邊重名に会って移動に必要な書類を手に入れるよう依頼した。私はメダンで渡邊と面識を得ていた。渡邊は慰問任務に従事していたが、メダンで除隊し、商売を始めていた。私と渡邊は気が合い、酒を酌み交わし、歌を歌い、文学を鑑賞した。渡邊を通じて弁護士と面識を得て書類を入手した。

私は海倫に書類を渡した。私は海倫に、自らを危険にさらさないでほしい、今回の計画が遂行できたら結婚してほしいと告げた。海倫は無理だと答え、時代の責務に応え、個人の愛ではなく大きな人類愛を語るべきで、まだ春が訪れていないと言った。海倫の顔は光に照らされ、明るく美しい。私は知っている。世界には海倫を止める力はないのだ。彼女は固い意志で明日への道を踏み出し、嵐のなかを飛んでいくのだ。

### 『戦塵抄：上』『流星』所収、 1949年三八節(国際婦人デー)執筆

インドネシア独立戦争では少なからぬ少女少尉が生まれ、また少なからぬ戦地での恋を生んだ。人民は政治に覚醒した。女性も政治に参加し、従軍し、そのことはインドネシアの女性解放運動の1つのかたちであった。

政治工作大隊のスダンニ尉官は高等教育を受け、機転が利いて勇敢で情熱がある。2週間トラックに揺られて前線に行き、講演を行った。度重なる業務とトラックに揺られ続ける生活でも、ダンニは疲労の色を見せず、毎日早く起き、希望の朝を笑顔で迎える。

ダンニはラーマン副官と恋仲にあり、2人の恋愛

は部隊の同僚の羨望の的であった。2人はついに同居することとなった。ラーマンは新婚初夜にダンニに物質的に豊かな生活をさせられないことが心苦しいと告げた。ダンニはラーマンに不幸も貧困も気にしないと告げた。2人は結ばれた。ラーマンは前線に出発するよう命じられたとダンニに告げた。ラーマンが出征したら戻ってこないかもしれないことをダンニはわかっていた。しかしラーマンに国に報いる重責を放棄させることはできない。ダンニはラーマンの服を脱がせた。戦時の命は短く無常で、とても尊い。戦時の若者には命を享受する権利がある。

### 『南燕北雁』『流星』所収

スパイの容疑をかけられて私はメダンにある日本軍の憲兵隊に連れていかれた。反ファシスト同盟のメンバーであるとの嫌疑をかけられ、拷問を受けた。中国人、インドネシア人、オランダ人、アンボン人が毎日首を切り落とされ、明日は我が身と思っていたが、1か月後に思いがけず釈放された。しかしそれは日本軍の下で働くことと引き換えだった。国際運輸会社の社長である近藤の下で働くこととなった。のちに国際運輸会社は日本軍の外郭団体の傘下にある特務機関の化身で、憲兵隊と一緒にマラッカ海峡で活動していると知った。友人たちも恋人の秀虹も離れていった。そんな私を近藤の秘書で台湾人の愛子が気にかけてくれた。私は愛子と結婚した。愛子は台湾を支配してきた日本に批判的であった。

私は愛子に内緒で秀虹を探し、2年ぶりに再会できた。ある日、秀虹が私を訪ね、憲兵隊に連行された陳という人物の救出を依頼してきた。愛子と家族を危険にさらせないと、依頼を受けるかどうか悩んでいたら、愛子がいつまで怖気づいているのかと私を奮い立たせた。私は陳の救出に手を貸すことにした。

手がかりなく1週間過ぎ、私は愛子を通じて、憲兵隊で陳の件を担当している大谷行宥を紹介してもらった。大谷は礼儀正しく勉強家で、酒が強く、酔うと必ず「暁に祈る」を楽しそうに歌った。5夜にわたって一緒に酒を飲み、私は大谷と気が合い、親しくなった。近藤が病気の時に、憲兵隊本部に大谷を訪ね、囚人を見に行こうと提案し、中を見せてもらった。何日か通ったが、陳は見つからなかった。

私は陳を見つけられなかったと秀虹に告げた。秀虹は、私が日本軍に降伏し慈悲を乞い屈辱を忍んで生き長らえていると罵倒した。陳を探すために大谷

に接近したり憲兵隊に通っていたりしたことが誤解されたらしい。うなだれて家に帰り、大酒を煽っていると、愛子に責められた。その苦しさは生活のせいではなく、秀虹に振り向いてもらえないからだろうと。なんてことだ。2人の女性に2つの誤解だ。

### 『黒い果実』(黒心桃)『流星』所収

ボゴールは第二次世界大戦の被害を受けず、静けさと美しさを守った。フシンは母と暮らしている。母は若くして未亡人となり、気丈に雑貨店を切り盛りする。フシンは夏休みに都会からやってきたリナとひと夏の恋に落ちる。リナはもうボゴールに来ることはないと言い、口にしていたランブータンの種を丘の上に植えた。

フシンはすぐにリナを忘れた。10年後、強い母は亡くなった。フシンは母に負けない有能なビジネスマンになった。リナが植えた種は木に育ち、黒い果実を付けた。

フシンは故郷を一度離れたが、30歳を過ぎたころ故郷に戻ってきた。かつて住んでいた家を壊して新しい家を建てた。家政婦として雇った村の若い娘がフシンとの間に女の子を生み、その子はアイナと名付けられた。フシンはアイナと母に対して横暴にふるまい、2人に行動の自由を与えなかった。アイナと母はフシンの同行下でのみ外出を許された。アイナは美しく成長し、青年マイシャに求婚されたが、フシンがそれを拒絶した。

ある日アイナは丘の上に黒い実を付ける木があると母に話した。それを耳にしたフシンは、その木は自分が自分の土地に植えたものだと言い、黒い実を取りに行った。フシンは木に登ってふと気づくと、マイシャにはしごを外され、降りられなくなっていた。なんとか木から降りて家に戻るとマイシャがいるのみで、アイナと母はいなくなっていた。マイシャはフシンに、自分とフシンがアイナと母に騙されたのだと告げた。アイナと母は、ロダというさすらい人の助けを借り、斧でドアを壊して家を出て、3人で東に向かう汽車に乗った。フシンへの別れの手紙はなかった。

フシンは家を売り、車で東に向かった。彼は人のために庭の手入れをしたり、暇があれば子供たちと遊んだりした。夕方になると道の曲がり角に座り、往來を見るのが好きだった。行き交う車に愛した人の姿が見えることを恐らく期待していたのだろう。

### 『逃亡』『流星』所収

日本軍がメダンに入ってきた時、メダンの守備隊はすっかり撤退し、日本軍は1発の銃弾も浴びずにスマトラ島の最大都市を獲得した。私は日本軍がメダンにやってくる前に仲間たちと一緒に100マイル離れた森の中に脱出していた。そこには私たちと同じように脱出してきた人たちがいた。小屋を建てた者たちが小屋をシェルターとして開放し、1つの小屋を蚊帳で区切って数家族が同居することとなった。

私の仲間は、魚売りでありながら脚本・演技・演出をこなす優れた演劇人の高、歌を口ずさみ、バイオリンを弾き、作曲をする音楽家の放、メダン駅で力仕事に従事し石像を彫刻する方、叙事詩を書くのが好きな劉、絵を描き小説を書く私の5人だ。私たちはメダンで『新路』という文芸特集欄を共に手掛けてしていた。

ある日、夢娜(もな)という女性が私たちの小屋に現れた。戦火を逃れここまで来たが住むあてがないためしばらく滞在させてほしいという夢娜を私たちは受け入れた。私たちの蚊帳の1つを彼女に渡し、もう1つの蚊帳に5人が密集し、生活は不便を強いられたが、私たちはみな夢娜に惹かれた。夢娜をめぐる5人の絆が壊されそうになったため、建設的な平和闘争で彼女をめぐる戦うことにした。満月の夜にそれぞれが彼女のために作った作品を披露し、彼女に選んでもらうこととした。

満月の夜に披露された作品は、夢娜をモデルとした方の石像も、バイオリンで美しく奏でる放の楽曲も、力強くユーモアに満ちた高の演劇も、どれも素晴らしかった。私は夢娜をモデルに絵を描いたが、感傷的過ぎて失敗した。最後に劉だ。彼はなかなか作品を披露しようとせず、作品を用意していないと小声でいった。突然夢娜が割って入り、詩を書いたのだからそれを披露しよう劉に告げた。劉は「ひまわり」と題する詩を朗読した。ソネットの形式で、わずか14行、200字足らずの詩に愛の真意が存分に表現され、一語一行がダイヤモンドのように輝いていて、完璧きだった。『西廂記』[元代の雑劇]の描写よりも甘く美しい。艾青[中国の詩人、1910-1996年]の美しさと、バイロン[イギリスの詩人、1788-1824年]の豪放さと、臧克家[中国の詩人、1905-2004年]の憤み深さと、キプレンスキー[ロシアの画家、1782-1836年]の情熱があった。

劉が詩を読み終えた時、私たちは長い間沈黙し、一言も発することができなかった。沈黙を破ったのは

方で、劉が優勝者だと言った。劉は夢娜と顔を見合わせて、2人は笑い出した。劉はこの詩は実は夢娜が書いたのだと告白した。それを聞いた私たちの気持ちは説明するまでもないだろう。嵐がどのように収まったのかも想像できるだろう。

## 2. インドネシア独立戦争期の華人

インドネシア独立戦争期に、華人はインドネシア共和国側でなくオランダ側についたと見られがちであった。また、戦時の混乱の中でオランダ植民地期や日本軍政期にもみられなかったような広範で凄惨な暴力にさらされ、自身や親族・友人らの生命、財産を理不尽に奪われる過酷な経験を強いられた人たちが多かった[貞好 2016: 134-135]。

「一人の山」はプラナカン華人の青年・天風を主人公とし、華人社会で疎外感を抱く天風がインドネシア国籍を取得してインドネシアの兵士として従軍する様子を描いている。「戦争捕虜」は、オランダ側で働いていた華人男性と思しき「私」が旧友に遭遇し、華人に対する軍の対応を責めると、オランダ側で働いていたことを皮肉られる。「負傷兵」では華人は物語の中心ではないが、民兵や正規軍が華人に寄付を強要したり、華人から略奪したりして軍資金を維持していたことが描かれる。

### 「一人の山」(一人的山)『流星』所収、1948年執筆

日本軍の侵攻により、天風の家族と父の商店は壊滅の渦に巻き込まれた。天風はインドネシアの革命地下組織に参加した。天風はインドネシアで生まれた他の華人同様、華人の血筋を引き、華人の知恵と忠に厚く穏やかで、華人の顔と名前をもっていたが、中国の言語を知らず、中国の習慣とは疎遠であった。華人の中には天風の背後で彼を華人に非ずと侮辱する者もいた。天風は自身をインドネシア民族と見なし、土地を愛する心をインドネシアの郷里に捧げる決意をした。父が他界し、天風と中国とのつながりは断られた。

日本が敗戦し、インドネシア独立戦争が起こった。インドネシア独立戦争に対する華人の見方はおおむね2つに分かれた。同情と反感である。反感をもつ者は、インドネシア独立戦争に同情的な華人にも反発した。

インドネシア独立戦争期には、中産階級である華

人を粛清のターゲットとする場合もあった。華人はインドネシア人から財産をはぎ取って富を蓄えたとさえ言う者もいる。宗教を矛にクルアンを盾にして、殺戮と強盗を行い、武装組織の財源を確保する者もいる。

スカルノがインドネシア国籍法を公布したことを受け、現地生まれの華人の中にはインドネシア国籍を選択し、インドネシアの兵士となる者もいた。こうした行為に反感を持つ華人もいた。しかし極端な排華を緩和した側面もあった。

天風はインドネシア軍に入隊し、前線に派遣された。そこは幼いころに愛した山だった。日本軍が木材を伐採し、2本の木だけが残されていた。天風はそこで銃撃に遭った。地面に倒れ、出血がひどかった。天風は2本の木に命を感じた。木の背景には青い空を白い雲が漂っていた。そこに自由を感じた。迫りくる死の恐怖から逃れるために銃で自殺しようと試みたが、太陽の熱を感じ、引き金を引くのをやめた。静かに横たわっていると、紅白の輝ける独立旗が体を覆い、爽快な心地よさを感じた。

### 「戦争捕虜」(俘虜)『夜明け前の行脚』所収

私は日本占領期に抗日活動を行うためにオランダ軍に参加した。日本が敗戦し、連合軍が上陸した後、連合軍で日本軍の武装解除などを担当した。その後、その業務をオランダ軍が引き継ぐこととなった。他方でオランダ軍は、インドネシアと独立運動を戦い始めた。私は除隊を申し入れたが受理されず、仕方なく続けた。バンドンとボゴールの間でインドネシア軍に捉えられた。インドネシア軍には旧知のハッサンがいたため、ひどい待遇を受けずに済んだ。

私はハッサンにインドネシア軍による華人の虐殺の話題を振った。彼は「こうした出来事が発生するのは、正しいか間違っているかに関わらず、その根源は我々の祖国にある」といった。不思議なことに、インドネシア政府関係者は華人の惨殺事件について回答するときに皆この言い方をする。以前バタヴィアの官邸で何度か聞いた。これはドイツのユダヤ人強制収容所の入り口に書かれていた文言「正しかりょうが誤っていようがここが祖国だ」と同じだ。それをハッサンに言うと、彼は私に復讐心に満ちた口調で、若き革命家である君はなぜオランダの手先になったのかと尋ね、気まづい思いをした。

ハッサンとゆっくり話をした。彼は農家の出身で、

田んぼの肥沃な新稲とその美しい緑を見るのが好きで、土地を愛していた。しかし両親は彼が農民になることを望まず、勉強で身を立てることを望んだ。おじは彼に、インドネシア民族には知識人が不足しており、若い世代が学び研究し民族革命と国作りを担うよう託した。ハッサンは教員となり、学び続けた。ハッサンは、自分は1匹のホタルの如く小さいが、ホタルにも果たすべき義務があり、それは光を放つことだと語った。デリで知り合った華人の友人の励ましを得て、ハッサンは歴史を学び、自由、平等、独立は人類の基本的な要求であると確信し、インドネシアも他国と同様に独立を達成することを信じていると告げた。

ハッサンは山の向こうを見つめている。山の向こうにはハッサンの故郷がある。今は田植えが終わった時期だ。ハッサンの土地への強い愛は嶺を越えて故郷の黒い土壌に残ったままだ。

### 『負傷兵』『夜明け前の行脚』所収

1946年の春のことである。ハミッドはマランにいた。彼の連隊はスラバヤの戦い〔1945年10月末～11月〕で多くの兵士を失い、撤退時に多くのはぐれ者を吸収した。共和国政府からの給与が途絶え、軍は市民から借金するほかなかった。当面の負担は、ブルジョアジーで商人階級とされる華人が担うのが当然とされた。道徳と正義の観点から、また、三民主義に照らしても、華人がインドネシア独立のための闘争を支援するのは当然のことだ。しかし華人は民兵や正規軍が敗走する際に略奪され殺された。ハミッドはそれに心を痛めたが、彼に何ができようか。それはデリ政府が頭を痛めるべき問題だ。

同僚のアブドゥラが自分のダイバーズウォッチを売ってやるとハミッドに持ち掛けた。アブドゥラが購入を持ち掛ける物品は華人商人からはく奪したものだ。ハミッドは教育を受けられず、極貧にあり、時計を、とりわけダイバーズウォッチなどを手にすることができない。今やインドネシア民族は独立の扉をたたいている。ハミッドはついに時計を手に入れた。

アブドゥラは時計を売った後、1週間後に出兵し、姿を消した。兵士はそれぞれにお守りをもっている。ハミッドはアブドゥラがこの時計をお守りにしていたことを思い出した。アブドゥラはお守りを売って人生を棒に振ったのだと考えた。

ハミッドは出兵した。激しい銃撃戦になった。目の

前で雷鳴が響き、地面に跳ね飛ばされた。左腕を負傷し、もはや半壊状態だった。自ら手を切り落とし、止血した。時計も壊れてしまった。しかしこの時計はやはりよいものだった。ハミッドは腕を一本失ったが、アブドゥラとは違い、まだ生きている。明日にはまた立ち上がり戦えるだろう。

### 3. 混とんとした社会情勢の中で 何が正義かを問う作品

以下で挙げる作品は、戦時という異常な状態の中で、何が正義で人道にかなっているのかを問う内容となっている。「戦塵抄：下」は、インドネシア出身者がオランダ側とインドネシア側に分かれて戦う悲劇を描いている。「兵同志」は民衆の協力を確保しながらゲリラ戦を展開するインドネシアの兵士たちが、闖入してきた素性不明な民衆を、オランダ軍の動向を伝えるインフォーマントである民衆を守るために殺してしまう物語で、ぎりぎりの判断を迫られる戦地の過酷さを描いている。「暗流」では、不条理がまかり通る社会を是正するために自己の判断で偽善者をマーキングし抹消する青年が描かれる。「橋」では、インドネシア軍、オランダ軍とイギリス軍で構成される連合軍、日本軍という複数の勢力によって分割統治されるメダンで、境界を往来するうえでのルールを守りつつ人道に配慮した解決策を生み出したヨーロッパ人が描かれる。

### 『戦塵抄：下』『流星』所収、 1949年三八節(国際婦人デー)執筆

インドネシア独立戦争期にオランダは特別な兵団を1つ配置していた。その任務はインドネシアの掃討であった。一昨年〔1947年〕私は戦場記者としてその本部を訪れ、軍曹に業務を報告した。翌日バンドンに向かう予定があり、本部内で1泊し、バンドンに向かう車があれば同乗させてほしいと依頼した。

宿泊のためテントに案内された。暗闇からやあと呼びかける声があった。口ぶりからしてジャワ人のようだった。彼は自分が病気であると告げた。重苦しい雰囲気耐え難く、テントを離れて散歩に出た。酒を提供しているところに行き、ビールを飲んでいると、テントの人物がやって来た。卑屈で謙遜した様子に、同席を勧めざるを得なかった。私は彼にジャワ人かと尋ねた。彼はバルトと名乗り、キリスト教徒のジャワ人だと答えた。バルトは相変わらず鬱々とし

ており、私たちはテントに戻った。こんな人と会ってしまったことを私は後悔した。

バルトは重そうに息をした。とても辛そうだ。バンドンに出撃した時に腰を痛めたそうで、その時の経験を語った。「俺は兄と一緒にだった。兄はキリスト教徒ではなかった。我々は大隊からはぐれ、インドネシア国軍に囲まれた。インドネシア国軍は兄がキリスト教徒だと指さした。兄はムスリムだと名乗ったが撃たれた。私の番になった。私もムスリムだと名乗った。殺されかけたが1人の尉官が制止して捕虜となった。そこで私は病気になった。捕虜の交換機関を通じて釈放された。」

バルトは私にキリスト教徒かと尋ね、私はそうだと答えた。バルトは、君はいい人に違いない、君のために祈ると言った。翌朝、出発の時、バルトは別れの握手を差し出し、話を聞いてくれたと礼を述べた。バルトの話は平淡で味気ないものかもしれないが、人道的な問題を深く抱えている。

#### 『兵同志』『夜明け前の行脚』所収

私はインドネシア共和国の正規軍に参加し、ボゴールをオランダから奪還する任務にあった。同僚にアブがいた。アブは元々左派の武装集団に属していたが、どういう経緯か右傾化して正規軍に入隊した。我々は彼を同志と呼んだ。彼はそれを喜んでいて。彼は唯一の「兵同志」となった。アブは率直で、自分の欠点を認める勇気があり、現実を受け入れてそこから学ぶことを厭わなかった。彼は自身を農夫だと語り、生産と創造が任務であり、破壊と殺戮を招く戦争への憎悪を繰り返して強調した。しかしアブの笑い声には、ナイフのような鋭さと、残酷さ、暗さ、悪意を感じるが多かった。

インドネシア独立軍に協力した人たちが逮捕されたため、人びとと独立軍との間に距離ができ始めていた。ゲリラ戦には民衆の支援が必要である。アブは人びとの防衛心を理解しつつ、どうしたら民衆の支援を得られるかに頭を痛めていた。

アブは本部からスカブミへの進軍命令を持ち帰ってきた。月もなく、雲もない静かな夜に私たちは出動した。誰もが神経を尖らせて待機していた。すると人影が出てきた。アブは不安げに拳銃の安全装置を引いた。旧日本兵のつぎはぎの軍服を着たみすぼらしい男で、汚泥で髪が糊のように固まり悪臭がした。彼はスガンドと名乗った。我々は彼を警戒した。スガ

ンドは、腹が減っている、ソロから来たとだけ繰り返す。愚鈍そうだ。

アブは、裏切り者に気をつけろと呟いた。スガンドは何を聞いてもそうだと答えるか、要領を得ない答えをした。嘘をついているのかもしれないし、あるいは間違っただけを言っても気にしないだけかもしれない。彼は19歳でソロから来たと言う。それは本当かもしれないし嘘かもしれない。最大の謎は、彼がいつの間にか我々に近づいたのか誰も知らないということだ。

私たちは村を制圧しに来たオランダ軍を攻撃するために潜伏していた。3人の村人が私たちにオランダ軍の居場所を知らせに来るはずになっていた。この3人をスガンドに見せることはできない。もうじき3人が来る時間だ。

15分後、アブは銃を抜いた。銃をスガンドの目に向けると、あっという間に火花が出た。スガンドは目を開けて「ムルデカ！」と叫んで倒れた。私たちは、彼の額の髪の毛に火薬が燃え移った硫黄の匂いを感じた。

#### 『暗流』『夜明け前の行脚』所収、1948年執筆

メダンの北端に「夜のパリ通り」と呼ばれる通りがある。静寂な通りの先には、山桜やハイビスカスが美しく植えられた庭付きのカフェがあり、夜のパリの優雅でメランコリックな雰囲気を楽しむことができる。男女のカップルが、孤独な文学青年が、みな思い思いに時間を過ごす。私はこのカフェで読書をしたりと空想をしたりするのが好きだった。

ある日、混雑して席を見つけれなかったインドネシア人青年が私のテーブルに同席した。何となしにおしゃべりが始まり、話題は尽きなかった。まずインドネシアの詩人ハイリル・アンワルの死を悼んだ。それはインドネシアの文壇の彗星の落下だった。それから夜のパリ通りの雰囲気の気まぐれさを話題にした。冷たい静けさをまとう時もあれば、今日のように熱く賑やかな時もある。

彼はテーブルの上に分厚い本を置いた。タイトルは『新経済学講座』だった。学生かと思いついて仕事を尋ねた。彼はデリ川の対岸の荒地に植えられた若木だと答えた。

突然、路上に人だかりができた。交通事故で人が死んだ。同席の青年は遺体を冷やかに軽蔑するようで見ている。彼は、インドネシア人はすぐに衝動的になるので騒ぐほどのことではないと誇らしげに言っ

た。遺体はB市の市長だった。オランダ人のために懸命に働くが、インドネシア人には一顧だにしない卑劣な人物として知られていた。

この事故は本当に交通事故なのだろうかと私は感じたことを声に出してみた。青年は「まさか」と答え、興奮していた。手帳を取り出し、人名を記したページからB市長の名前を消した。青年は、この事故は計画されたもので、ちょっとした技術と運、適切な時間と場所、人材があれば実行可能だと言った。彼は自分の過去を話し始めた。

青年は恋に破れ打ちひしがれていた時にオランダに半年間投獄された。釈放後、投獄中に知り合った人たちのエピソードをもとに人が人を食う社会を描いた小説を著した。文芸誌の編集をしている昔の同級生に原稿を渡したところ、劣悪な改変が加えられた上に、同級生の名前で出版されてしまった。青年は自分が弱すぎて恋人も原稿も奪われたと悟った。それ以降、青年は偽善的な人物を抹消することにより不合理な社会を是正するようになった。

青年は奇妙で、いささか狂気じみでいて、しかし愛嬌もあった。彼の話が実話だったのか、それとも空想好きの青年の創作だったのか今でもよくわからない。警察に通報しようかとも思ったが、結局名前を教えてもらえなかった。毎朝新聞で悪人が死んだという記事を見るたび彼の仕業かと猜疑した。青年に再会するのが怖くて、私は夜のバリ通りに繰り出すことはなくなった。

### 『橋』『流星』所収

1945年秋。連合軍が海岸沿いの数カ所からスマトラ島に上陸し、メダンに本部を置いた。やがてメダンは1国3君主というおかしな場所になった。連合軍の規模が小さすぎたため、日本軍は武器の所持を許され、内地の治安と秩序を維持し続けた。メダンでは共和国政府が成立しイギリスはそれを黙認した。オランダ文民政府(Netherlands Indies Civil Administration)は強く抗議したが効果はなかった。

オランダは、デリ川の橋の一本一本に障壁を設置した。川の片側にはオランダ軍の衛兵、もう片側には日本軍の制服を着たインドネシア兵がいた。メダンへの出入りは可能だが、双方から許可を得なければならない。

ある日、ロサリンがオランダ軍の衛兵が立つ橋の入り口に現れた。彼女はインドネシア地区から橋を

渡ってきた。ロサリンは美しく、深紅のワインのようで、飲む者はみな酔いしれた。彼女はしかし身分証を帯同していなかった。彼女と恋仲にあるジョン軍曹は彼女をこっそり入境させようとしたが、ウィリアム少尉が現れ、入境させられないと彼女に告げた。ロサリンはインドネシア側に戻ろうとしたが、インドネシア兵も彼女の入境を断り、ロサリンは橋のうえで立ち往生した。ロサリンを橋の上に留め置くわけにいかず、ウィリアム少尉はイギリス軍総本部の上官に電話して指示を仰ごうとした。上官は本部の会議の判断を待てと言った。しかし会議が行われるのは何日も後のことだった。

ジョン軍曹はある方法をウィリアム少尉に提案し、その方法をロサリンに持ち掛けた。ロサリンが川に飛び込み、それをウィリアム少尉が救出するという方法だ。ロサリンはウィリアム少尉に救出されて入境でき、一件落着となった。ウィリアム少尉の上司は報告書にこう書いた。「ウィリアム少尉はデリ川で地元住民のロサリンを救助した。その勇気は賞賛に値するので、その記念と将来の励みになるように勲章を授与する」。

### おわりに

日本占領期からインドネシア独立戦争期のインドネシアを舞台にしたルーの小説には、いずれの作品にも、独立のために戦うインドネシアの人たちに対する尊敬と共感が強く示されている。現実のインドネシア社会で華人が共闘できない状況があることを踏まえて、ルーは抗日活動を展開する華人を描くことを通じてインドネシアの人たちとの連帯を試みたのかもしれない。他方で、戦時という非常事態により「人が人を食う」状況を招いていることを描き、日本占領期が終わって平穏となったシンガポールで戦時のような状況を再び生み出すことがないように警告を発しているようにも読める。女性が男性をうまく操って物事が進展していくルーの小説世界は、武力によらない秩序構築を実現するうえでルーが女性の指導力に期待していることを示しているようにも読める。

## 参考文献

---

### 日本語

貞好康志 2016『華人のインドネシア現代史——はるかな国民統合への道』木犀社。

篠崎香織 2021「マレー世界における華語作家の国家構想——ルー・ポーイエと1940年代のインドネシア文芸界」光成歩・山本博之編著『『カラム』の時代Ⅻ——マレー・イスラム世界の社会変容と女性』京都大学東南アジア地域研究研究所、pp.61-69。

### 華語

威北華(張景雲編) 2016『威北華文芸創作集』Petaling Jaya: 有人出版社。